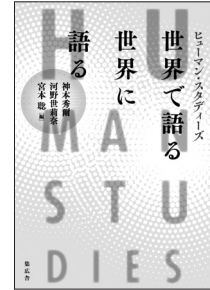


〈自著紹介〉

『ヒューマン・スタディーズ—世界で語る／世界に語る』  
神本秀爾・河野世莉奈・宮本聡 (編著)、集広舎、2022年3月



神本秀爾

## 1. はじめに

筆者の教師・研究者としての関心のひとつにアウトリーチがあり、これまでに代表編者として文化人類学の初学者を想定した『ラウンドアバウト——フィールドワークという交差点』(2019)、『マルチグラフト——人類学的感性を移植する』(2020)を公刊してきた。本書はその焦点を一段広げ人文(科)学をテーマに据えた28本の原稿を集めて編んだものである。以下に本書の趣旨などを紹介する。

## 2. 背景や趣旨

国際文化学科英語コミュニケーション専攻のカリキュラムの中心は、教職を含む英語と主に英語圏の文化関連科目である。本書の執筆を計画した時点での問題意識は、学部や学科といったスケールの違いを問わず、本専攻のような「言語」と「文化」を中心的に学ぶ場における、両者の有機的な関係を模索し続けることの必要性である。学習の対象としての「言語」と「文化」の性質の差異はさまざまに説明することが可能だが、そのひとつとして身につけることの意義に対する合意が広く形成されており、成果を可視化する仕組みができあがっている「言語」と、そうではない教養的な「文化」という明確な評価軸の有無をあげることができる。

本書の「まえがき」で編者は文化人類学者のティム・インゴルドを引きながら、学びを「迷路での学び」と「迷宮での学び」とに分類した。そして前者を一般的には高校までで学ぶような「あらかじめゴールが設定されており、行き止まりになってしまわないように、正しい道を選択しゴールに到達することを目指す」学び、後者を大学に入って出会う「明確なゴールの見えない世界の中で探求し続ける」学びに分けた。こぼれ落ちるものがあることを承知で図式的に分けるならば、「迷路での学び」は「言語」の学習、「迷宮での学び」は「文化」の学習と重なるところが多いと言える。文化人類学的な視点からは、言語も数多くある文化の一要素であり、両者は対立するものではなく、大学という「迷宮での学び」／「文化」のなかに「迷路での

1 後者に分けられた領域の学問の社会的意義が問われるようになって久しいが、本書に関連する近年の出来事は、2010年代の(人)文系学部不要論の盛り上がりである。三谷尚澄は『哲学してもいいですか?文系学部不要論へのささやかな反論』[2017]において、哲学の社会的意義を「これから三十年の日本社会を下支えするうえで有用となる『市民的器量』を身につけた人材を育成すること」(86)と定式化している。ここで言う「市民的器量」とは「社会的要請」や「社会的有用性」とされるものについても鵜呑みにするだけでなく批判的に思考し、より良い方向性に導こうとする力でもあり、本稿でいう「文化」の領域についての学習もまた、この市民的器量の醸成に資すると考えている。

学び」／「言語」が含まれると見ることも可能になる。

本書では両者を包摂する用語として「ヒューマン・スタディーズ」(人間学)を用いて、関連する諸学に関するエッセイ／コラムをまとめることを目指した。本書は2022年度より英語コミュニケーション専攻の「教養演習Ⅰ／Ⅱ」内での使用教材のひとつに指定しているが、学生の人間をめぐる諸学および諸現象に対する関心と呼び起こす機会のひとつとしてだけでなく、ある程度のまとまりを持った文章を読むトレーニングの材料にもなっている。

本原稿のためにあらためて通読したところ「迷路での学び」にも迷宮的要素があり、「迷宮での迷い」にも迷路的要素があるというのが筆者の実感である。その理由のひとつは、それぞれの執筆者が一人称を用いながら叙述を展開していくことで、それぞれが疑問や迷いの前に立ち止まったことや乗り越えようとしたことが伝わってくるからだと考えられる。

### 3. 中身について

本書は3部構成になっていて、それぞれ「学ぶこと・教えること」「文学・言語パフォーマンス」「社会のなかの生」とのタイトルをつけている。そして、各部には英語コミュニケーション専攻教員の原稿を含んでいる。具体的な章立てと執筆者は以下の通りである。

まえがき [編者]

#### 第1部 学ぶこと・教えること

Who are you? — あなたの「学ぶ」と「生きる」 [和栗百恵]

テスト、あるいは「能力」について [大森万理子]

子どもの「自己決定」 — ストリートの子どもたちの労働と教育から考える [針塚瑞樹]

ヤギのいる学校、ヤギのいるまち — 「子どもが歩ける距離」を生きていく [木下寛子]

【コラム】身近な地域に学び・伝える — 「社会調査実習」担当教員の経験より [永吉 守]

他者の場所で遊び、わたしの話を紡ぐ [池田竜介]

英文法の学び方 — 映画から読み解く強調表現 [吉村理一]

英語が簡単に思える方法 — 「英語学」への誘い [萱嶋 崇]

【コラム】英語教科書における題材研究のすすめ [塩田裕明]

#### 第2部 文学・言語パフォーマンス

文学と生きるあたたかさ — 本と記憶をたどる [田中優子]

本を読むこと — 「衣服」という観点から [河野世莉奈]

【コラム】うたを通じて拡散される場所のイメージ [神本秀爾]

本当の「鬼」とは「何」か? — ゾンビ映画のヒロインたちの系譜に『鬼滅の刃』を位置づける [福田安佐子]

【コラム】重ね合わせる生の雰囲気 [猪熊慶祐]

笑いを知り、その活力を「わかる」 [猪熊慶祐]

異文化との出会い — 五年間のアメリカ留学経験を通じて [ファネリ幸織]

【コラム】アメリカの大学でたまたま受けた授業がぼくをイタリアに向かわせた [北川了次]

### 第3部 社会のなかの生

食をめぐる想像力——ナショナル・フードから珍味まで [神本秀爾]

国民国家の植民地主義と「民族」 [永田貴聖]

【コラム】異文化で自文化を研究すること、語ること——非日常的な軍隊経験と前後の日常 [朴眞煥]

嗜好品が示す「大人」と「子ども」の境界 [草野 舞]

災害と家——建物の復旧と住み続けることをめぐって [野口雄太]

恋人に対する〈信頼〉はどこからくるのか？ [深海菊絵]

【コラム】フィジーのろう者の「ことば」の世界 [佐野文哉]

生命と技術と、その選択をめぐる [宮本 聡]

人の目に映らない霊たちはいないのか？ [河西瑛里子]

わたしたちと国際社会——法学的視点から [北 和樹]

【コラム】「お利口さん社会」を超えて [藤田 中]

編集後記 [神本秀爾]

## 4. おわりに

本書はどこから読んでも良いようにできている。読者が自身の関心にしがたって読み進めていくこと自体が「迷宮」での学びの体験だとも言える。言語と聞いて音声言語しか思いつかなかった読者はフィジーのろう者の世界を知ること、自身の言語観が広がるかもしれない。テキストやメディア・コンテンツに関する原稿を読むことは、普段深く考えることなく消費者としてのみ接していた各種コンテンツの見え方を大きく変えることだろう。霊長類や生命倫理に関する知見に触れることは、自身を含むヒト観そのものを問い直すことにつながるかもしれない。なお、本書には引用文献リストをつけており、このリストにあげられている文献は初学者が一步学習を進めてみようと思うときの「迷宮」での道案内になることが期待される。

### 謝辞

本書の出版に際しては令和三年度久留米大学文学部教育研究振興資金の助成を受けました。記して感謝申し上げます。

### 引用文献

三谷尚澄 2017『哲学しててもいいですか？文系学部不要論へのささやかな反論』、ナカニシヤ出版。